Providence Plus a Banking Account[1)]

——『アロンの杖』における M. Weber 的要素について——

Providence plus a Banking Account

——On the Element of M. Weber in *Aaron's Rod*——

北　崎　契　縁

1

『英語青年』5月号（1989）の「新刊書架[2)]」の中で，塩田勉氏は『ロレンス研究——『アロンの杖』——』（D. H. ロレンス研究会編）の書評をおこなっている。氏は，まずこの研究書についての全体的な評価と，執筆者10名の各論文の骨子を手際よくまとめて，それぞれの内容を紹介している。そして最後に「苦言を呈すれば」と断って，この書の「索引」の不備を指摘し，さらに「ロレンスの本質に係わる問題」が抜け落ちていることを次のように指摘している。「……出身階級と教育との葛藤，階級否定と回帰を洞察した先駆的な作品であり，階級という視点を加えない限り，『アロンの杖』に内在する複雑な問題性や矛盾の全貌は必ずしも明らかにならない」と手厳しい。

今回この研究書の完成のため共同研究に参加した一人として，筆者は上記の「苦言」に少しでも答えられはしないかと考えたのが本論執筆の動機であった。

確かに，塩田氏の指摘通り，「階級」という視点は作品の中に存在する。具体的には，アロンが労働者（「賃金労働者」）階級の出の人物であり，炭坑組合の「組合書記」をしているという冒頭の設定からして，はっきりしているからである。また，第2章「ロイヤル・オーク酒場」にみられる酒場のおかみと坑夫たちとのやりとりには，明らかに「階級と教育」の問題が彼らの議論の対象になっている。さらに，アロンがイタリアのミラノからフィレェンツェへ汽車旅行を共にする二人の若者はいわゆる「中・上流階級」の出身である。二人の若者に出会って，いろいろなハプニングやちょっとした事件が起こったときのアロンの反応や，逆に二人の若者の振る舞いなどには「階級否定と回帰」といったテーマが扱われていることは誰が見てもはっきりしている。

以上の場面場面を「階級」という視点から整理していけばそれなりに「内在する複雑な

問題性や矛盾」は見えてくるであろう。しかし，この「階級」という視点は，この小説に関するかぎり，単なる「上・中流」対「下層」階級とか，「資本家」対「労働者」の間の対立・葛藤といった表面的な図式だけで捉え切れるのだろうかという疑問を筆者は感じるのである。確かに，上述したように三つの章には「階級」の問題ははっきりしすぎるくらいはっきりと出ている。しかしこの三章だけでは今一つ「階級」の問題はどこに「問題」があるのかが不明なのである。この疑問の答えにわれわれを導いてくれる章がある。「階級」の問題は正面きって出てはいないが，ロレンスが抱えていた「階級」の問題をよりパースペクティブに捉える有力なヒントを与えてくれる章である。それは第12章「ノヴァーラ」で，この中でアロンとフランクス卿が交わす 'Providence'「神」をめぐっての議論には，「階級」の問題と密接に絡んでいる「宗教」の問題が出ている。アロンとフランクス卿とのやりとりが，やがて最終章に至って，アロンとリリーの長々とした「神」論議となって展開するのは，12章と21章がこの「宗教」という点で深い関連のあることを物語っていると言えよう。換言すれば，「宗教」の問題と絡めて「階級」の問題を究明しないかぎり，少なくともこの小説の中の「階級」の内実は真に明らかとはならないように思われるのである。

ところで，12章でのアロンとフランクス卿のやりとりは明らかに，ウェーバー的な視点から書かれていると言ってよいだろう。M. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』[3)]を髣髴とさせる内容を，特にアロンとフランクス卿の会話は担っているからである。要は，「プロテスタンティズム」という宗教の視点を抜きにしては，二人のやりとりの意味や，ひいてはアロンとリリーとの関係もほんとうに分かったことにはならないのである。アロンとリリーとの関係をウェーバー的な視点で捉え直すこと，そのことがやがては「階級」の問題を真に照射することにつながっていくように思われる。

2

イタリアのノヴァーラにいるリリーからきた一通の手紙を頼りに，アロンは一人ロンドンを出立する。そうしてノヴァーラに到着するが，肝心のリリーの姿は見えず，がっかりしたアロンは仕方なく駅よりタクシーに乗り，リリーの紹介してくれていたウィリアム・フランクス卿という人の邸宅へやってくる。アロンはやがて「柱のある大きな部屋」へ案内される。そこは「分厚いトルコ絨毯が床に敷き詰められ，すばらしい装飾が施されていた」部屋であった。感心して立ちつくしているアロンの前にやがて当家の主人であるウィリアム卿がその姿を見せる。

……ウィリアム卿は小柄で，こぎれいな老人である。白い顎髭をちょっとたくわえ，

真紅の絹で縁どりをした黒のビロードのタキシードを身にまとったその立ち居振る舞いには，宮廷人のような礼儀正しさがある。

「はじめまして，シッソンさん。イギリスから直接いらっしたのですね。」

ウィリアム卿は，丁寧にやさしげに手を差しのべ心から客人をもてなそうとする老人らしい笑みを見せた。

「リリー君は行ってしまったのですか」と，アロンは聞いた。

「はい，数日前に出ていかれました。」

アロンはためらった。

「それじゃ，ぼくが来るとは思っていなかったでしょうに。」

「いや，いや，お待ちしておりましたよ。お会いできてたいへんうれしいです。……さあ，こちらへ来てご夕食でもどうぞ……」[4)]

すばらしい豪華な邸宅，「宮廷人のような礼儀正しさ」など，ウィリアム卿はいかにも「上流階級」の出身を思わせる人物として描かれているように思われる。しかし，この後で，ウィリアム卿がイタリア・イギリス・ルリタニアといった国からもらった「勲章」のことが皆の話題になり，所望されて卿が次々と三か国の勲章を胸に飾り付けて皆から褒め讃えられるシーンが続くが，「勲章といっても，実際は，彼が戦争に使った幾千ポンドものお金に対して与えられたものだったのだ」(p. 198) と暴露されているとおり，卿は上流階級出身などではなく単なる成り金者にすぎないことがはっきりするのである。事実，ウィリアム卿のモデルは「ウォルター・ベッカー卿」で，卿はイタリアのトリノに住むイギリス出身の金持ちの船主であったようである。[5)]

ともあれ，アロンのお目当てであった肝心のリリーは不在ということがはっきりしたが，「いや，いや，お待ちしておりましたよ。お会いできてたいへんうれしいです」という卿のことばは，リリーの友人であるアロンに対して彼がかなりの期待を抱いて待っていたことをそれとなく物語っているようである。実際この後，二人はかなり突っ込んだ議論を戦わせている。上述したモデル問題の続きとして，ロレンスは H. T. Moore に宛てた手紙の中で，卿についてさらにこう書いている。

> 卿は，安穏無事であることの大切さ，銀行預金残高そして権力を擁護する議論をぶち，一方わたしは公然たる自由を擁護する論をぶった。[6)](傍点筆者)

小説の中でも，このモデル問題とほとんど同じ議論がアロンとウィリアム卿との間でなされている。第12章「ノヴァーラ」がその箇所で，現実のベッカー卿はウィリアム卿になっていることは当然であるが，ベッカー卿の「銀行預金残高」は「神プラス銀行預金」と

いった表現に変わっていて，これはウィリアム卿の「信念」となっている。そしてこの「信念」をめぐって繰り広げられる二人の議論には，この章の，ひいてはこの小説全体の中心となる重要な意味が含まれているように思われる。

ところで例の勲章談議が一段落した直後ウィリアム卿はアロンに向かって「ほとんど直接的といっていい攻撃に出てきた」[7]という箇所があるが，これは「勲章」など「一片の金属にしかすぎない」と覚めた眼で見ている「新参者」のアロンが卿には気になってしようがないからである。そして卿は，なんとかアロンという男の身の上についてもっと詳しく知りたいと思う。

> 「ということは，シッソンさん，あなたはイタリアへ来られることについてこれといった目的はお持ちじゃないんですね。」
>
> 「ええ，特にありませんが」と，アロンは答えた。「ただ，リリーに合流したかったのです。」[8]

こうして，なんの「目的」もなく，しかも家族をイギリスに残してやってきたアロンが妻へ多額の金を払い，自分にはほんの少しばかりの額をとっておく状況になってしまったという事の経緯を老人は聞き出すことに成功する。ここから卿は，先に出ていったリリーとアロンの生き方についての比較をしながら，自分の「信念」を屢々開陳する。

> 「あなたはリリーに似ていますね……神の摂理を信じていますね。」
>
> 「神つまり運命をね」と，アロンは言った。
>
> 「リリーは神と呼んでいました」と，ウィリアム卿は言った。「わたしとしては，神にプラス銀行預金を勧めています。神プラス銀行預金という信念は動きませんね。神があっても預金がないということは，これまでの私の観察では，ほぼ致命的だということです。リリーとわたしはその点について議論しましたよ。彼は報酬を求めずに徳を施すといった形の信念を持っています。でも，徳だけを求め，報酬を無視するような態度を近いうちに彼が取らないようになってくれることを願っております。銀行預金に裏打ちされた神。生きていくのに十分なお金が入ったあかつきには神を信じなさい。それ以前に（原文イタリックス）神を信じるのは危険だと思います。神については，人は確信（原文イタリックス）なんか持てませんからね。」[9]（傍点筆者）

「神プラス銀行預金」という信念を表面的に見ているかぎり，まず「神」の存在がなんの疑問もないくらいに大前提として受け入れられていて，しかもその上にこの世の財産が付加されれば，鬼に金棒といった意味にとれないことはないが，ウィリアム卿の真意は全

く正反対である。というのは，先の引用の後半部分で「生きていくのに十分なお金が手に入ったあかつきには神を信じなさい。それ以前に神を信じるのは危険だと思います。神については，人は確信なんか持てませんからね」と言って，真っ向から「神」の否定につながる考えを持っているからである。特に，「神については，人は確信なんか持てませんからね」というところには，いかにも現代的な神不在の問題がよく出ていると言えよう。

このように「神」と「お金」を切り離して別個のものとする考え方は，明らかに「信仰心」の薄れた金儲けだけを目的としたウィリアム卿の生き方を如実に反映していると言えよう。卿はさらにこうも言っている。

> 「自分自身と家庭のために蓄えを作ること，それこそがわたしにとっての神の意味です。ところで，リリーも，またあなたご自身も，日々のパンを稼ぎ，蓄えを作らなくてもいいとする神を信じているとおっしゃる。はっきり言っておきますが，わたしはそんなことは理解できません。実際リリーは結局のところわたしを説得できなかったのです。[10]」（傍点原文イタリックス）

ここでは，ウィリアム卿にとっての「神」と，リリーやアロンにとっての「神」との違いがよく出ている。ところで，「蓄え」を作ることが「神」だとする考え方と，「蓄え」を作らなくてもいいとする「神」観との相違はいったいどこから生じてきたのであろうか。

ここでわれわれは，M. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の第二章「禁欲と資本主義精神[11]」の中で追求されている問題を想起してみよう。「祈りかつ働け」という修道院内部に密着する「キリスト教的禁欲（世俗外的禁欲）」を「世俗内的禁欲」の姿に育てていくきっかけとなったのがルッターの「天職」という思想だったと言われている。大塚久雄氏は先のウェーバーの著書の訳者であるが，その訳者解説の中で，この「天職」の概念について J. バニアンの例を取り上げて次のように解説している。

> ……彼（バニアン）はベッドフォード郊外の――この郊外というのが重要なのですが――いかけ屋さんです。しかも貧乏ないかけ屋さんですが，立派な信仰をもっていた。こういう職人たちが，とりわけ郊外から農村地区に広がっていた。こういう人々は，金儲けをしようなどと思っていたわけではなく，神の栄光と隣人への愛のために，つまり神からあたえられた天職として自分の世俗的な職業活動に専心した。しかも，富の獲得が目的ではないから，無駄な消費はしない。それで結局金が残っていった。[12]（括弧内及び傍点筆者）

そしてこの結果，「資本主義の精神」が，つまりは資本主義の社会機構が生まれたとして，その経緯が語られる。

> ところが，結果として金が儲かっただけではない。他面では，彼らのそうした行動の結果として，また意図せずして，合理的経営を土台とする，歴史的にまったく新しい資本主義の社会機構をだんだん作り上げていくことになった。そして，それがしっかりとでき上がってしまうと，こんどは儲けなければ彼らの経営をつづけていけないようになってくる。資本主義の社会機構が逆に彼らに世俗内的禁欲を外側から強制するようになったわけです。こうなると信仰など内面的な力はもういらない。いつのまにか，ジョン・ウェズリーが嘆いているように，信仰は薄れていくことになる。こうして，宗教的核心はしだいに失われて，世俗内的禁欲のエートスはいつとはなしにマモンの営みに結びつき，金儲けを倫理的義務として是認するようになってしまった。これが「資本主義の精神」なのです[13]。（傍点筆者）

「マモン」ということばは，同じロレンスの『恋する女たち』に出てきて，徹底した近代化を成し遂げる炭坑王（第17章：The Industrial Magnate[14]）G. クライチの姿を想起させる。また「金儲けを倫理的義務」として是認しているのは，『アロンの杖』ではまさにウィリアム・フランクス卿その人であり，彼の取り巻き連の一人で「若い小佐」と呼ばれる男である。彼は「……結婚して，女にわずかな扶養費で生活して欲しいと期待するなんて，ひどく利己的ではありませんか。しかもたまたまあなたが神と僥倖なんてものを信じておられるということで，つねに不安定な生活を奥様に強いるなんて。……皆がそんな生き方をしたら世界はどうなるのでしょうか」（p. 206）と，アロンを諫めるような言い方をしているが，これこそ「金」がすべてだとする「義務」感に縛られた人のことばでなくてなんであろう。

「金」がすべてだとするこのような考え方は，アロンが出奔した故郷の炭坑町でもその支配力を誇っている。そこで次ぎに，第2章「ロイヤル・オーク酒場」で繰り広げられている，酒場の「おかみ」と常連客との議論を見てみよう。

3

まず小説の冒頭場面から見てみよう。

> アロン・シッソンは，だれよりも遅くなって，丘を登っていく黒い鉄道線路づたいに，職場から家へと向かっていた。帰宅が遅くなったのは坑口で集会に出ていたため

であった。彼は炭坑の坑夫組合の書記をしていた。馬鹿げた口論をかなり聞かされ，いらいらしていた。[15)]

組合の集会で「馬鹿げた口論をかなり聞かされ，いらいらしていた」アロンの感情は帰宅しても癒されず，そのまま第二章の酒場でのやりとりにつながっていく。

酒場の常連客は「みんな上の部類の坑夫たちで，知的な議論の好きなおかみのお気に入りだった[16)]」と説明されているが，こういった坑夫連の中へ，アロンともう一人インド人の医師シェラディが加わっている。彼らは「博愛主義」という話題をめぐっておもしろいやりとりを交わしている。おかみは坑夫たちが集会をもっては騒ぎ立てている点をとらえて，「いつになれば分別がつくんでしようね」とシェラディ医師に尋ねたところから議論が進展する。この「分別」とは「共通の利益のために皆が共に行動すること」とおかみは説明する。そしてさらに「共通の利益」とは「自分の幸せだけでなく，他の人たちの幸せ」も考えて行動することだと彼女は言い，次のように続けている。

「坑夫の幸せですって。それは自分と家族が楽に生活でき，子供たちと自分自身を教育できるだけの賃金を稼げることですわ。教育こそ坑夫が最も必要としているものですわ。[17)]」

このあとも彼女は「金さえあれば，分別を働かすことができるはずですよ。それこそ金を持っていれば，できることなのよ」と「生活」から始まって，「子供の教育」「分別」果ては博愛主義に至るまで，「金」さえあれば可能だというふうに，すべては金があるかないかにかかっているという考え方をしている。そしてアロン自身もこの時点では「……突き詰めていくと，すべてが金の問題になってくる。好きなように考えてみてくれ，どちらから回っても金さ。われわれが生きているのは金のためだ。そしてわれわれの生活で価値があるのは金だ。……それ以外は何もないんだ[18)]」と，いかにもおかみに与する考え方を見せている。要するに，二人は「金儲けを倫理的義務」とする「資本主義の精神」をよく代表していると言えよう。

しかし何故か一人アロンだけは「いらいらする[19)]」のだった。いつもなら，「ウィスキー」「女」「音楽」などがその苛立ちを癒してくれたのだが，今夜にかぎってその効き目がないことにアロンは気づく。彼はおかみの「博愛主義」にも，シェラディ医師の「人道的な立派なことば」にも，また妻の「善意」と「愛」に対してもむかつきを覚えているからである。なぜだろうか。

ここでもう一度「世俗内的禁欲」のエートスの持ち主だった J. バニヤンを思い起こしてみよう。彼は「貧乏ないかけ屋」だったが「立派な信仰」を持っていた。彼は初めから

金儲けをしようと思っていたのではなく，「神の栄光と隣人への愛のために」神から与えられた「天職」として自分の世俗的な職業活動に専心し，結果として「金」が残ったのであった。ところが，「金」を増やす原動力であったはずの「博愛主義」とか「愛」が今やその力を失い，宗教の形はそういった主義主張を示す概念としては残っても，その精神が消えてしまったのである。ところがアロンには，その「精神」をどこかで取り戻そうとする面が備わっている。彼は「人間の内にある真の人間としての中核」[20]つまり「精神」を破壊されることだけは決してしたくないと思って，イギリスから，また家庭からも出奔したからである。このようなアロンに一種の「純粋な宗教」を求めるプロテスタントとしての姿勢を認めることが出来よう。換言すれば，もう一度バニヤンの時代人が持っていたような純粋な信仰心を回復したいという願望がアロンには芽生えているとも言えよう。それに反して，おかみはもちろんのこと，アロン以外の酒場の連中にはそんな気持ちは微塵もなく，ただ使い古された「博愛主義」とか「愛」あるいは「教育」の問題といった観念をもて遊んでいるに過ぎないのである。こういった連中と自分との間に横たわる大きなギャップにアロンは「むかつき」を覚えたのだ。

アロンの持つこのような二面性――「われわれの生活で価値のあるのは金だ……それ以外は何もないんだ」と思い込んでいる面と「人間の内にある真の人間としての中核」を求める面――は，この小説の最後に至るまでずっと続いていく基調であると言ってもよい。

以上，3節では，金がすべてだとする考えを，アロンも含めて「労働者」の側から眺めてきたが，今度は「金持ち」というか「支配者」の持っている特徴的な面を，アロンがミラノで出会うイギリス人の若者二人に焦点を絞って考えてみよう。

4

ノヴァーラからミラノへやって来たアロンは，鉄工業をなりわいとする家の生まれのアンガス・ゲストとオーストラリア出身で弁護士の息子であるフランシス・デッカーの二人に出会う。二人は共にローマで絵を勉強するためにイタリアへやって来たのだった。二人はいわゆるお金持の「中・上流階級」の出身である。ミラノの町でたまたま出会った三人はその翌々日，次の目的地フィレンツェに向けて汽車の旅に出る。

まずアロンが「三等車」に，若い二人が「一等車」に乗ったことから「切符」の違いをめぐって，ちょっとした「階級」の差の問題が生じる。「車中でお昼をご一緒しましょう」とフランシスは提案し，その申し出が受け入れられると，「それじゃ，お昼までさようなら」と彼が大声で言ったときの，いかにも高くとまった「泰然自若ぶり」がアロンの心を何とも不安にしてしまう。なぜこんなことが起こるのか。次の引用は，結局「現金」があるかないかということだけが，このような事態を引き起こした唯一の理由であること

を物語っている。

……切符の値段の違いが引き起こす事実に反する状況は実に屈辱的だった。勇気と知性……いや，教育の点から言っても，自分は二人の「紳士」には劣っていないということをアロンは十分に知っていた。彼は，本質の問題では，二人が自分のことを劣った奴だとは思っていない，むしろその反対だということも知っていた。彼らはアロンその人とその生の力に，さらにはその生い立ちに対してさえも仰々しいくらいの尊敬の念を持っている。にもかかわらず，かれらには現金を持っているという測り知れない利点があるのだ……そしてしかもその優位を二人は守ろうとしている。彼らは，金の優位が単なる人為的なものにしかすぎないことを知っている。だがそれだけに二人はそれをしっかり握り締めているのだ。彼らは中流の上といった階級である。イートンとオックスフォードに学んでいる。そして二人はその特権に寄生して生きようとしているのだ。このような時代には，無理やりに，自分からその権利を放棄するなんて馬鹿者のすることだ。そういう訳で，「では，お昼にまたお会いしましょう」となった次第だ。[21]

「勇気」「知性」「教育」といった「本質」の問題では，むしろアロンのほうが優れていることは，二人は「知っていた」と書かれている。しかし「現金」があるということは，残念ながら「測り知れない利点」があるのだ。二人は，たとえそれが「人為的なもの」であっても，現にゆったりとして，「赤いビロードとかぎ針編みの座席」のある「一等車」に乗れて，しかも「優越感」を味わうことが出来るのだ。しかし，こういった優越感をお金は与えてくれるが，ここには「本質」の問題を忘れた「寄生中」的な生き方しか残されていないのだ。

要は，金があるかないかということだけが問題であって，その金が残っていった元の「生き方」，つまり「祈りかつ働け」という「世俗内的禁欲」の生活の基礎であった「信仰」はもはや存在しないのだ。信仰という基盤がないために，おそらくこの二人の若者の，金があるが故の「特権」もやがて「寄生中」のように，いずれその根元から断ち切られて死んでいく運命にあるのではないだろうか。だから，それが怖いからこそ，二人は，本質は分かっていてもそれと正面から取り組もうとせず，「人為的なもの」にすぎない「金」の優位を「しっかりと握り締めている」だけなのだ。

もっとも二人の若者といっても，アンガスは「大庭園のある家に生まれ，恐ろしく固定した意志に支配され，金に縛られた家の息子である」[22]という点で，ほとんど「マモン」の化身のような人物であるに対し，シドニー生まれのフランシスは「はるかに冒険好きで自由で，しかも情熱的な家の出で，植民した人特有の新鮮さと適応性が具わっている」とい

う具合に，アンガスより人間の「本質」的な面でまだまだそこへ近づける可能性のある人物として描かれてはいる。しかし，そのフランシスさえも，

> ……階級から来る優越感が今日ではごまかしにすぎないことを，自分自身では知っていた。しかし，相変わらず，そのごまかしは割りに合うのだ。だから割りに合うかぎりは，そのごまかしを使おうとしているのだ。[23)]

こうして，結局のところ二人の若者とアロンは，人間の「本質」といったところで真に出会いを果たすことなくその関係を終わらせていると言える。それどころか，若い二人は，自分たちの階級意識からついに抜け出せないままに終始している。「汽車の旅」の最後のところで，三人がフィレンツェへ着いて宿を探す段になったとき，二人の若者がアロンはもっと安い「ホテル」へ行ったほうがいいと思っていることが，それとなくアロン本人に伝わってきたという箇所があるが[24)]，これはまさしく，二人が，アロンとは係わりたくない，へたに係わってじゃまをされ，せっかくの特権を失いたくないとして，自分たちだけの「特権」にしがみついている姿勢を物語っていると言える。

5

以上，イタリア在住のイギリス人実業家フランクス卿と，イタリアへ絵の勉強に来ているアンガスとフランシスという「中流の上といった階級」の若者たちとアロンとの出会いとその意味を探ってきた。

そうして明らかになったことは，アロンのそういった人々との付き合いの特徴が「金持ち連」に魅力を感じるという面と，逆に，そういった連中を鋭く批判的な目で眺めるという二面性を持っていたということであった。このアロンの二面性は，遡れば，第二章「ローヤル・オーク酒場」でのやりとりにも見られたものであった。このアロンの二面性はまたロレンス自身の持っていた二面性とも言ってよいだろう。最終章「ことば」は，リリーとアロンの「神」をめぐっての長い議論となっている。このリリーとアロンをロレンス自身の「上部意識と下部意識を別々に人物化したもの[25)]」と捉えると，リリーは「上部意識」つまり「金持ち連中」や，「博愛主義」「愛」「金」を批判してあるべき姿を摸索するロレンス自身が持っている「観念」の部分を人物化したものであり，アロンは「下部意識」つまり現実はやはり「金」しかないと思い込む「現実」に立脚したロレンスのもう一つの面の人物化ということになり，この「観念」と「現実」は小説の最後までいってもついに融合されず，対置されたままで終わっている。

しかし，こんな二人のやりとりの中から感じ取れる基調は，人間が真に生きるとはどう

いうことかという点を，たとえば仏教のニルヴァーナ[26]まで持ち込んで真摯に二人が（ロレンス自身の自問自答という形で）問うている点にある。このような二人のやりとりは，時代を遡るが，メソジスト派の「信仰復興」を目指したジョン・ウエズリー自身の次のような自問自答と根は同じものと言える。

「私は懸念しているのだが，富の増加したところでは，それに比例して宗教の実質が減少してくるようだ。それゆえ，どうすればまことの宗教の信仰復興を，事物の本性にしたがって，永続させることができるか，それが私には分からないのだ。なぜかといえば，宗教はどうしても勤労（industry）と節約（frugality）を生み出すことになるし，また，この二つは富をもたらすほかはない。しかし，富が増すとともに，高ぶりや怒り，また，あらゆる形で現世への愛着も増してくる。だとすれば，心の宗教であるメソジストの信仰は，いまは青々とした樹のように栄えているが，どうしたらこの状態を久しく持ちつづけることができるだろうか。どこででも，メソジスト派の信徒は勤勉になり，質素になる。そのため彼らの財産は増加する。すると，それに応じて，彼らの高ぶりや怒り，また肉につける現世の欲望や生活の見栄も増加する。こうして宗教の形は残るけれども，精神はしだいに消えていく。純粋な宗教のこうした絶え間ない腐敗を防ぐ途はないのだろうか。……[27]」（傍点原文のまま）

「勤勉で質素になる」ことは「神」のみ心に沿うことでよいことなのだが，「近代の資本主義の精神」としての「制度」「機構」という形に出来上がってしまうと，宗教本来の「精神」が消えていく。この元の「精神」へ回帰していくことは果たして可能なのだろうか。この点については，ウェーバーはかなり悲観的な見方をしている。

近代の職業労働が禁欲的性格を帯びているという考えは，決して新しいものではない。専門の仕事への専念と，それに伴うファウスト的な人間の全面性からの断念は，現今の世界ではすべて価値ある行為の前提であって，したがって「業績」と「断念」は今日ではどうしても切り離しえないものとなっている。そのこと，つまり，市民的な生活のスタイルがもつ——それがスタイルのないものでなくて，まさしく一つのスタイルであろうとするなら——こうした禁欲的基調を，ゲーテもまたその人生知の高みから『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』と，ファウストの生涯の終幕によって，われわれに教えようとしたのだった。……[28]」（傍点原文のまま）

「人間の全面性」を切り捨ててまで「業績」中心のスタイルをとることは，まさしく，人間が機械や組織に屈服し，金中心の生き方を余儀なくされてきたヨーロッパの近代社会

全体の姿を象徴的に物語っている。

そしてさらに，この近代社会の行き着く先までを見通したような鋭い洞察がつづく。しかもその根源的な理由は，あくまでも「ピュウリタン」であることが「天職人」としての道をしか取らざるを得ないようにしたという社会の「倫理的雰囲気」つまり「エートス」[29]にあったとしている。

> というのは，禁欲は修道士の小部屋から職業生活のただ中に移されて，世俗内的道徳を支配しはじめるとともに，こんどは，非有機的・機械的生産の技術的・経済的条件に結びつけられた近代的経済秩序の，あの強力な秩序界を作り上げるのに力を貸すことになったからだ。そして，この秩序界は現在，圧倒的な力をもって，その機構の中に入り込んでくる一切の諸個人——直接経済的営利にたずさわる人々だけではなく——の生活のスタイルを決定しているし，おそらく将来も，化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで決定しつづけるだろう。バックスターの見解によると，外物についての配慮はただ「いつでも脱ぐことのできる薄い外衣」のように聖徒の肩にかけられていなければならなかった。それなのに不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い檻としてしまった。禁欲が世俗を改造し，世俗の内部で成果をあげようと試みているうちに，世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力になって，ついには逃れえない力を人間の上に振るうようになってしまったのだ。今日では，禁欲の精神は——最終的にか否か，誰が知ろう——この鉄の檻から抜け出してしまった。……将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか，そして，この巨大な発展が終わるとき，まったく新しい預言者たちが現われるのか，あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか，それとも——そのどちらでもなくて———種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか，まだ誰にも分からない。それはそれとして，こうした文化的発展の最後に現われる「末人たち」(letzte Menschen) にとっては，次の言葉が真理となるのではなかろうか。「精神のない専門人，心情のない享楽人。この無のものは，人間性のかつて達したことのない段階にまですでに登りつめた，と自惚れるだろう」[30]と。——(傍点原文のまま)

長い引用となったが，ウェーバーの言いたいことは，近代資本主義の精神のみならず，近代文化の本質的構成要素の一つである「天職理念」を土台とした「合理的生活態度」は，キリスト教的禁欲精神から生まれ出たということ，しかもこの「禁欲」は単なる非行動的な生活態度ないしは行動様式をいうのではなく，逆に，「業績」と「断念」をセットにして，ちょうどオリンピックのマラソン選手よろしく，他への欲望はすべて抑えて，ある一つの目標のために全エネルギーを注ぎ込む，そういった「行動的禁欲」の様式を言ってい

る。しかし，この「行動的禁欲」つまりは「祈りかつ働け」の生活は，皮肉なことに「近代的経済秩序の，あの強力な秩序界をつくり上げるのに力を貸すこと」になったのであった。そして「いつでも脱ぐことのできる」と思っていた「薄い外衣」は「鋼鉄のように堅い檻」となって，人間から「禁欲の精神」を奪い，ついには「精神のない専門人」とか「心情のない享楽人」といった，機械同然ともなり果てたロボット人間を生み出してしまったのである。（この辺りは，まさしく，ロレンスが彼の傑作『恋する女たち』で描いている内容と一致する。[31]）

ところで先程の引用の終わりに近い部分に，「将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか，そして，この巨大な発展が終わるとき，まったく新しい預言者たちが現われるのかあるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか，……」という箇所があった。中でも「新しい預言者」，「思想や理想の力強い復活」といったことばは，ロレンス自身がよく「預言者」として捉えられたり，また人間の「思想や理想」の真の「復活」とは何かということをたえず自身の小説やエッセイで語っている内容[32]を，このウェーバーのことばはみごとに代弁していると言ってもよいかもしれない。

しかし，この『アロンの杖』では少なくとも「現実」と「観念」との融合はなされないままに終わっており，したがって未来を見通したような「預言者」的な面もあまりなく，また「かつての思想や理想の力強い復活」もこの小説の中では見られない。ただ，営利の追求を敵視する「ピューリタニズム」の経済倫理が実は近代資本主義の生誕に大きく貢献したという歴史の逆説を証明した，と一般に言われている M. ウェーバーの思想は，このロレンスの小説にも底流となって流れており，ロレンス自身も，資本主義の矛盾なり問題点をなんとかしたいという意識を持ってこの作品を書いたことは疑いのないところであろう。

いずれにしても，ピューリタンとして生まれピューリタン独特の「社会の倫理的雰囲気」つまり「エートス」の中で育ったため，ほとんど無意識的にウェーバーが論じていた内容と符号する形で，この『アロンの杖』が書かれたということは言えるのではなかろうか。[33]

注

1） D. H. Lawrence, *Aaron's Rod* (Penguin Books, 1980), p. 172.

2） 『英語青年』，Vol. CXXXV No. 2.（研究社，1989），p. 95.

3） 大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店，1989）。イギリスの階級と階級制度は，世界で初めての産業革命の経験と，資本主義的工業による社会の再編

成を通じて生まれた，と言われているが（安東伸介他編：『イギリスの生活と文化事典』〔東京：研究社，1986〕800～825頁―階級制度の変遷―参照。），「資本主義の精神」と「プロテスタンティズムの倫理」という宗教的な要素との密接なつながりを見ていたウェーバーの視点はこの『アロンの杖』にも十分通用するものと思われる。

4） *Aaron's Rod*, p. 162.

5） K. Sagar, *The Life of D. H. Lawrence* (London : Methuen, 1982), p. 115.

6） *Ibid.*, p.115.

7） *Aaron's Rod*, p. 172.

8） *Ibid.*, p.172.

9） *Ibid.*, p.172.

10） *Ibid.*, p.173.

11） 大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，pp. 289-371.

12） 同掲書，p. 404.

13） 同掲書，p. 405.

14） D. H. Lawrence, *Women in Love* (Penguin Books, 1968) , p.237-262.

15） *Aaron's Rod*, p. 11.

16） *Ibid.*, p.26.

17） *Ibid.*, p.27.

18） *Ibid.*, p.29.

19） *Ibid.*, p.31.

20） *Ibid.*, p.34.

21） *Ibid.*, p.236.

22） *Ibid.*, p.237.

23） *Ibid.*, p.237.

24） *Ibid.*, p.246.

25） 吉村宏一・北崎契縁訳，『アロンの杖』（東京：八潮出版，1988），p. 433.「解説」の項参照。

26） *Aaron's Rod*, p. 343.

27） 大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，pp. 352-353.

28） 同掲書，p. 364.

29） 同掲書，p. 388.「エートス」について，もう少し補足すると次のような意味である。「―『エートス』とは単なる規範としての倫理ではない。宗教的倫理であれ，あるいは単なる世俗的な伝統主義の倫理であれ，そうした倫理的綱領とか倫理的徳目とかいう倫理規範ではなくて，そういうものが歴史の流れのなかでいつしか人間の血となり肉となってしまった，いわば社会の倫理的雰囲気とでもいうべきものなのです。そうした場合，その担い手である個々人は，なにかのことがらに出会うと条件反射的にすぐその命じる方向に向かって行動する。つまり，そのようになってしまったいわば社会心理でもあるのです。主観的な倫理とはもちろん無関係ではないけれども，もう客観的な社会心理となってしまっている。そういうものが『エートス』だ，と考えてよいのではないかと思います。」（以上，大塚久雄氏の「訳者解説」より。）

30） 同掲書，pp. 364-366.

31）注）の14）参照のこと。

32）ロレンスは今日のヨーロッパ文明（ロレンスが活躍したのは，第一次大戦を挟んだ1920年代ではあるが，「予言者」的な彼の言辞は死後50年以上を経過してますます的を得ていることが日々新たになってくるように思われる）の歪みを生み出したもとが，キリスト教文明に代表される特徴的な姿勢，つまり「精神」を高く評価して「肉体」を無視する傲慢なところにあったとして，たとえば「チロル地方のキリスト像」というエッセイで，また，「大審問官」の物語へのコメントなどで，「肉体」の「復活」を執拗に唱えている。と同時にロレンスは，人間が人間らしく生きるには「肉体」の復活もさることながら，さらに忘れてならないこととして，「肉体」と「精神」の均衡を保った生が絶対必要であると考えて，そういうバランス思想，つまり「全人」としての生き方の「復活」をも考え続けたのである。

33） ウェーバーとロレンスの関係については，二人の女性つまり Richthofen 姉妹であるエルゼとフリーダに焦点を絞って書かれた *The Richthofen Sisters — The Triumphant and the Tragic Modes of Love* by Martin Green（London : Weidenfeld and Nicolson, 1974）に詳しく書かれている。ロレンス自身はフリーダを通じて，彼女の姉のエルゼがウェーバーの愛人であったこと，またウェーバーの思想がどのようなものであったかをそのことを通して知っていたと思われるが「ウェーバーとロレンスは全くお互いのことを知らなかったし，互いに相手についての知識がないものだから，影響を受けるということもなかった」と，上述の M. Green は記している（*Ibid.*, p.158.）。しかし，同じプロテスタントの環境に育ったため，二人は「同じ軌道」（*Ibid.*, p. 152）を歩いていたと Green は言い，具体的にロレンスの作品の人物とウェーバーとの類似性について言及している。

たとえば，『虹』の Alfred Brangwen の生き方は，ウェーバーのそれを想起させるし，『恋する女たち』の G. クライチのある面は「ウェーバーのことを読者に喚起させ」，クライチ家とウェーバー家の「不幸」にも似たところがあると指摘している（*Ibid.*, pp. 159-161.）。

ただし『アロンの杖』については，筆者が本論文で用いたようなウェーバー的な視点はなく，この作品は「英語で書かれたドイツ小説」で，その構造はいわゆる Bildungsroman であるという指摘がされているにとどまっている（*Ibid.*, p. 341.）。